



鳳来寺山自然科学博物館

コノハズク展示コーナー

鳳来寺山自然科学博物館は1963(昭和38)年の開館で、この春48周年を迎える。愛知県博物館協会の前身である愛知県地区博物館連絡協議が結成された年であり、県下に11館の時代であった。国内でも少ない自然系博物館として、国指定天然記念物「鳳来寺山」を中心に奥三河地方の地学、植物、動物などの資料を、生態と分類に分けて展示する二重展示方式を全国で初めて取り入れて注目された。

間もなく半世紀を迎える建築であり、耐震工事に続き、2010(平成22)年3月にバリアフリー化と一部の展示改修を行った。スロープとエレベーターを設置し、トイレも改修。また、これまで外気と調和した環境負荷の少ない施設であったものを、空調設備を導入し、入館者に快適な室内環境にした。展示では鳳来寺山の仏法僧として知られ、県鳥でもあるコノハズクの展示コーナーをリニューアルし、コノハズクが鳴くようすを動画で見られるようにした。一度は見えていただきたい映像である。

目 次

●第35回東海三県博物館協会研究交流会	2
●「平成22年度部門別研修会」の報告	
調査・研究部門研修会、教育・普及部門研修会、保存・修復部門研修会	3

第 35 回

東海三県博物館協会研究交流会

1. テーマ「博物館が進める地域との連携」

近年、博物館では、分野を問わず利用者に開かれた様々な活動が行われ、その「知」の拠点としての存在には、地域から大きな期待が寄せられている。博物館は、学校教育はもちろんのこと、余暇を持つようになった団塊の世代などが知的な欲求を満たす場としても活用されるなど、多様な取り組みへの支援を求める利用者や各種団体は増加の傾向にある。

そこで今回の研究交流会は、地域との関わりの中で、博物館がどのような活動を展開し、また多様な機関や地域の人々と、どのような関係を築いていく必要があるのかを、先進事例を介して考える機会とした。

2. 日時 10月28日(木)・29日(金)

3. 会場 第1日目 亀山市青少年研修センター
(三重県亀山市若山町7番10号)
第2日目 関宿(重要伝統的建造物群保存地区)の視察

4. 主催 三重県博物館協会

5. 協力 亀山宿語り部の会、亀山市、亀山市教育委員会、三重県生活・文化部新博物館整備推進室

6. 参加者 愛知県 11名、岐阜県 7名、
三重県 31名、計 49名

■研究交流会(28日)

・主催者挨拶 三重県博物館協会会長
中村幸昭氏

・来賓祝辞 亀山市文化部長 川戸正則氏

・趣旨説明 三重県博物館協会事務局長
杉谷政樹氏

・事例発表(13:20～15:40)

【愛知県】

伊藤厚史氏(見晴台考古資料館学芸員)
「見晴台考古資料館の市民発掘について」

【岐阜県】

浦崎太郎氏(岐阜県博物館学芸部マイ・
ミュージアム担当課長補佐)
「郷・豊夢！プロジェクト ～ストーリー・
性ある地域教育プログラムの自力開発
支援～」

【三重県】

小林秀樹氏(亀山市歴史博物館 主幹・学芸員)
「亀山市歴史博物館のITを利用した亀山市

史編さん事業」

川戸真一氏(亀山宿語り部の会会長)

「亀山市域での語り部の活動と地元博物館への期待」

・ポスターセッション(15:40～16:10)

※各地の先進的な取り組みを会場に掲示されるポスターによりご報告いただきました。

【愛知県】

杉本 満氏(豊田市教育委員会文化財課
指導主事)

「地域資料館における地域学習サポーターの活用」

石田泰弘氏(愛西市教育委員会社会教育課
文化財係・学芸員)

「平成の御嶽祭 ～愛知県愛西市を事例に～」

【岐阜県】

浦崎太郎氏(岐阜県博物館学芸部 マイ・
ミュージアム担当課長補佐)

「『地域発！ふるさと学習プログラム』に対する大人の意識変容要因に関する実証的研究」

藤村 俊氏(美濃加茂市民ミュージアム
学芸員)

「地域のミュージアムができること～『ていねいな暮らしのあったころ』展をてがかりに～」

【三重県】

藤原秀樹氏(鈴鹿市考古博物館 主幹兼グループリーダー)

「鈴鹿市考古博物館 観月イベントの取り組み」
山本 命氏(松浦武四郎記念館 学芸員)

「博物館が進める地域との連携～郷土の偉人を活かした取り組み～」

筒井正明氏(斎宮歴史博物館 主幹)

「斎宮跡を中心とした地域との連携」

・研究交流会のまとめ(16:10～16:15)

松月清郎氏(ミキモト真珠島真珠博物館 館長)

・次回開催県のご案内(16:15～16:20)

村田真宏氏(愛知県美術館 副館長)

■情報交換会(17:30～19:30)

国民宿舎 関ロジ

■現地視察(29日／9:00～11:30)

関町関宿伝統的建造物群保存地区

嶋村明彦氏(亀山市教育委員会まちなみ
文化財室 室長)

亀山市歴史博物館

小林秀樹氏(亀山市歴史博物館 主幹・学芸員)

平成 22 年度部門別研修会の報告

<調査・研究部門研修会報告>

平成 23 年 2 月 16 日(水)、徳川美術館講堂には、加盟館職員はもとより一般企業からの参加も含めおよそ 38 団体、総勢 58 名もの聴講者が集まりました。今年度の調査・研究部門研修は「博物館・美術館における LED 照明の可能性」をテーマに、LED を開発研究するサイドとそれを利用するサイド、それぞれ立場の違う講師をお招きし、将来の館運営における LED の果たす役割などを認識、再認識するための研修会となりました。

はじめにパナソニック電工株式会社 照明デザイナー藤原 工氏による「LED を中心とした次世代光源によるミュージアム照明の新しい潮流」と題し、講演いただきました。快適な視空間を構成するための光の要素とは？光がもたらす展示物への悪影響を科学的な分析結果をもとに説明いただきました。また現場における LED の活用事例については、パナソニック電工運営の汐留ミュージアム(ルオーギャラリー)などを例に、多彩な LED 照明の利用方法を紹介、新型ミュージアム用スポットライトといった照明器具(同社名古屋特機営業所協力)など持参いただき、会場内で実際に LED 照明を設置し、その特性について実見する機会を得ました。鑑賞者にやさしい照明とは？ミュージアム空間を最適に演出する明るさとは？美術館と照明についてより具体的に理解されたい方は、パナソニック電工 HP の「汐留ミュージアム」を、また同ページに藤原氏のブログ<照明通信>もリンクされています。こちらでも是非チェックください。展示品と照明について、より具体的に分かりやすく解説されています。



(講演する藤原氏)

次に行われた事例発表では「利用者サイドの LED 照明の活用」と題し、徳川美術館企画情報部長小池富雄氏より、同館における LED の活用について発表いただきました。徳川美術館では平成 19 ～ 20 年の大規模改修の際、LED の導入を検



(LED の実物展示)

討し、その結果、適材適所(20 箇所ほど)に LED を配置しました。そのメリットとしては第一にコンパクトであること。照明器具は“隠す”を基本にしており、どこに LED が使用されているのか見学者は知る術もないのですが、白熱灯から LED に切り替えられた展示に関しては「以前よりきれいに見える…」といった声がりピーターより寄せられ、評判も良いとのことでした。実際に活用するなかで、長寿命で電球を取り替える手間も省かれ、さらに省エネなど相乗効果も期待できる。やはりより良い環境で作品を展示し、末永く保存するためにも LED の使用を徐々にではあるが増設できれば…とのことでした。館内の照明設備を全て LED に切り替えるには、かなりの予算を必要とし、高嶺の花である LED ですが、徳川美術館のようにピンポイントの切り替えであれば実現は可能、そんなヒントをいただける発表でした。



(徳川美術館 小池富雄氏)

最後に、本研修を開催するにあたり快く講師を引き受けて下さったお二方、会場提供いただいた徳川美術館、そして参加者のみなさまに、感謝申し上げます。ありがとうございました。

(近藤博 あま市美和歴史民俗資料館)

＜教育・普及部門研修会報告＞

平成 22 年度部門別研修会は、昨年に引き続き調査・研究、教育・普及、保存・修復の 3 部門に分かれて研修を実施した。

教育・普及部門研修会は、3 月 3 日(木)、愛知県芸術文化センター 12 階アールスペース EF を会場に実施した。研修テーマは『みんなで支える博物館～博物館ボランティア・友の会との連携』とし、基調講演 1 題、事例報告 3 題で講演いただき、美術館、博物館、行政など 37 の施設・部門から合計 57 名の参加があった。

基調講演では、和田岳氏(大阪市立自然史博物館学芸員)が、『博物館コミュニティの育て方』と題して、50 年以上の歴史のある友の会の設立経緯を辿りながら、友の会は博物館にとって最大のユーザーであり、かつ支持団体であることを、友の会の中にあるサークルのひとつ『なにわホネホネ団』の活動をとおり紹介された。友の会のメンバーは自由闊達に活動し、学芸員は後方支援の形で参加している。なにわホネホネ団の場合には、動物の解体から骨の収集などのイベントで資料収集と保管ができ、外部への発信により教育普及や広報の効果もあり、まさに博物館活動そのものに貢献しているといえる実態が紹介され、大変唆に富む内容だった。



(和田岳氏)

次に、事例発表として、中野晴久氏(常滑市民俗資料館館長補佐)から、資料館と友の会と地元の観光案内人の 3 者の関係を学芸員がうまく取りまとめながら進めている活動の紹介があった。友の会では、地元に着した古文書、陶芸、郷土史など各自の得意な分野で部会を持ち、学芸員と友の

会が相互に強みを補完しながら活動している様子が報告された。



(中野晴久氏)

次には、今回の企画の推進者でもあった安井謙介氏(豊橋市自然史博物館学芸員)から『地域に根付いた博物館へ』と題して、十分な自主的なボランティア活動が根付いていない現状を打破しようとする取組みが紹介された。意欲あるボランティアをリーダーとして育成し、連携することがボランティア活動の活性化に繋がるとのことである。また、意欲あるボランティアは地域のオピニオンリーダーである場合が多く、地域と博物館を結ぶ橋渡しの存在として貴重だとのことである。



(安井謙介氏)

最後は、現在は美術館を離れ、行政の立場で美術館活動を見守っている松本郁子氏(刈谷市教育委員会生涯学習部文化振興課)から『緩やかな連携 刈谷市美術館キッズボランティアの取組み』と題して報告があった。小学校の頃から美術館の活動に参加して、少数精鋭のキッズボランティア

を育てる。さらにその親世代の集まりである主婦グループの活動ともリンクさせ、緩やかな連携を持ちながら長い目で育てていく。やがて子供たちは大学生になり、小さい頃の経験を活かした大きな戦力となるというのである。



(松本郁子氏)

最後に、質疑応答を行い研修会の総括を行った。ボランティアは指示やサービスを受けるのではなく、自主的に活動し、その結果自らを磨く喜びや社会貢献できる喜びを感じられるように仕組むことが何よりも重要であることを学んだ。

この研修会は、愛知県陶磁資料館、新城市鳳来寺山自然科学博物館、でんきの科学館、豊橋自然史博物館、トヨタ博物館、INAX ライブミュージアムの6館で役割を分担して実施した。

(竹多格 INAX ライブミュージアム)



(質疑応答①)



(質疑応答②)

＜保存・修復部門研修会報告＞

平成22年度の保存・修復部門研修会は、下記のとおり開催した。

◎テーマ 「文化財保存修復の事前調査」

日 時 平成23年2月24日(木) 13:30～

会 場 名古屋市博物館

参加者 35名(他に講師等4名)

【基調講演】 杵名貴彦氏(山梨県立博物館)

演題「文化財の修復と保存科学」

【事例報告・実演】 杉浦秀昭氏(名古屋市博物館)・Mamiya デジタル・イメージング(株)

文化財の写真撮影と赤外線撮影

文化財の保存・修復には、それ自体の方法・技術以外に、十分な事前調査が重要である。今

回の研修は、保存環境や修復にかんする基本的理解を学習するとともに、保存修復の事前調査の手法と重要性について実際の事例をとおして認識を深めようとするものであった。

基調講演の杵名貴彦講師からは、保存科学の基礎と調査の手法についてお話をいただいた。

まず大前提として、自然治癒力をもつ生物と違い、文化財の状態は現状維持が最大限である。そのために文化財の製作時の状況を知り、それを踏まえて現状を把握し適切に管理する《予防保存》が第一で、《修復》はあくまで最終手段であることを改めて喚起された。

そのための調査や管理に必要な分野が《保存科学》であり、文化財を次世代に伝えるための学際的な自然科学的研究の総称であるという。そのなかで今回は「材料・製作」「展示・保存環境」「調査」の3つの観点から基礎認識と注意点を述べられた。その主な点を手短かに紹介すると、まず「材料・製作」では資料の製作方法と材質、およびその両者の重層的構造一何を用いてどのようにできているか、をよく知ることが必要である。それによって調査や修理の方法・材料が大きく異なるからである。資料が相性の悪い材質どうして製作されていた、あるいは修理された場合、その部分から劣化が進みやすい。「展示・保存環境」では、温湿度・照度・空気質・振動について述べられた。温度は現実には資料を扱う人間のためにある程度の水準に留めざるを得ないが、理論的な理想としては低ければ低いほどよいこと、合板や接着剤から放出される有機酸類が保存・展示環境の空気質に大きく影響することなどを指摘された。「調査」は非破壊を基本とし、構造・材質・状況の調査を実施する。調査に用いる各種電磁波（光）からエックス線・紫外線・赤外線を挙げ、それぞれの特性と有効性についてわかりやすく紹介された。

聴講して、適切な保存修復のためにどのような認識や注意、調査が必要であるかを学習することができた。お話のしかたも非常にわかりやすく、漠然かつ断片的だった保存科学の知識に、一貫した考え方の理論的枠組みを初めて得た参加者も少なくなかったようである。

実演の形で実施した後半の赤外線撮影の件は、

Mamiya の協力で撮影機材の基本原則を説明し、杉浦秀昭講師が実際に名古屋市博物館受託「紺紙金字法華経」の撮影を通じて確認した、その文化財調査・保存における有効性や条件を述べられ、また文化財の写真撮影一般にも話が及んだ。前半に沓名講師が述べられたように文化財は現状維持が最大限であり、杉浦講師の講義からは、失われゆく状態や情報を記録する文化財写真の撮影がある種文化財保存の一環を担うという認識の必要性が感じられた。また撮影した写真を今後どのように保管すべきかなど、参加者から強い関心のある質問が数多く出た。

今回の研修では保存修復の基礎認識を学ぶことができたとともに、今後に向けたテーマが多く洗いだされた。それらに取り組む関心も高まり、今後につながる結果が得られた。今回が保存修復研修の新しい展開のきっかけになればよいと願う。

最後に、重要な意識喚起となる話題を提供してくださった講師の沓名・杉浦両氏と、ご協力いただいた Mamiya デジタル・イメージング㈱に厚く謝意を表する次第である。

（藤井康隆 名古屋市博物館）

表紙館のご紹介

■鳳来寺山自然科学博物館

【開館時間】

9：00～17：00

【休館日】

火曜日（祝日の場合は翌日）
年末年始（12月29日～1月3日）
7月20日～8月31日・11月は無休

【入館料】

高校生以上：210円（160円）
小中学生：100円（50円）
20名以上の団体は（ ）内料金

【所在地】

〒441-1944
愛知県新城市門谷字森脇6番地
TEL 0536-35-1001 FAX 0536-35-5012

E-mail：hri-hakubutukan1@city.shinshiro.lg.jp

URL：http://www.city.shinshiro.aichi.jp/

【駐車場】

12台（近くに大駐車場あり）

【交通手段】

- ・JR 飯田線長篠駅から豊鉄バス田口方面行き乗車、鳳来寺バス停から徒歩 900m
- ・東名高速豊川 IC から国道 151 号線を北上、長篠交差点を左折し約 6km
- ・浜松西 IC から国道 257 号線で長篠へ入り、長篠交差点から約 6km

「愛知の博物館」 No.93

発行日 平成 23 年 3 月 31 日
編集・発行 愛知県博物館協会

〒461-8525
名古屋市東区東桜 1-13-2 愛知県美術館内
TEL (052) 971-5511 FAX (052) 971-5604